

『ひょうご歴史研究室紀要』第八号の刊行にあたって

本号は、「特集播磨の道」を組んだ紀要第六号に続き、特集号といたしましたでしたが、その経緯は、つぎの通りです。

赤松氏と山城研究班は、平成二十七年（二〇一五）四月のひょうご歴史研究室発足とともに組織され、日本中世史を中心とする文献史、城郭考古学を中心とする考古学の専門家が共同して活動してきました。平成二十九年三月刊行の『ひょうご歴史研究室紀要』第二号でいち早く「特集 赤松氏と城館研究の現状と課題」が組まれたことに示されるように、研究班としては先進的なものがありました。とりわけ評価したいのは、研究室が任務の一つとする県民対象の普及事業、つまり「歴史を通じての地域意識の醸成に寄与する」という目的のため、左記のように、率先してシンポジウムやフォーラムを開催してきたことです。

平成二八年度 大手前大学史学研究所主催・ひょうご歴史研究室共催のシンポジウム

「赤松氏研究の新展開 権力確立の過程をさぐる」(大手前大学さくら夙川キャンパス)

平成二九年度 ひょうご歴史研究室研究成果フォーラム

「赤松氏研究の新展開 発祥の地 赤松から考える」(兵庫県立歴史博物館)

ひょうご歴史文化フォーラム

「発祥の地 赤松から考える 赤松氏研究の新展開」(上郡町生涯学習支援センター)

常に二百人前後の聴衆を迎える集会は、県民の間にある赤松氏と山城に対する関心の高さを示しましたが、さらに令和四年（二〇二二）一〇月一六日、西播磨文化会館を会場に実施されたひょうご歴史文化フォーラム「前期赤松氏の実像 城郭と寺院から」で、一つの頂点を見たと思われず。特集として、本誌に記録を残しておこうとする理由でもあります。

大きな成果の背景には、赤松氏と山城研究班が、平成二八年度から三〇年度にわたって上郡町教育委員会が実施した赤松居館跡範囲確認調査、およびその取りまとめに協力し、また令和二年度からたつの市教育委員会と連携して、城山城について調査・研究を進めたことがあります。

それは、「兵庫県教育委員会文化財課の下、市町の文化財課と連携し、地域の歴史遺産を掘り起こす」という歴史研究室のいまひとつの使命を遂行し、成果を挙げたことでもあります。

フォーラムは、嘉吉元年（一四四一）の「嘉吉の乱」で赤松氏が滅ぶ以前、ということから「前期赤松氏」に限定した内容でしたが、たいへん充実したものとなりました。個人的な印象で言えば、江戸時代後期の「赤松村絵図」に白旗城の近く蒲鉾形の枠で囲み、赤松屋敷跡として描かれ、保存されてきたという経緯、禅宗寺院法雲寺・宝林寺などの建立に示される中央「京都との強い結びつき、古代山城を整備修築することで活用された城山城の構造など、フォーラムには興味尽きない論点がありました。近江六角氏との比較検討も、類例の少ない室町時代の守護のイメージを作る上でたいへん効果的でした。諸報告は本特集に掲載されていますので、直接、確かめていただきたいと思います。

聞けば研究班ではフォーラムの成功のために準備会を重ね、メンバー全員の役割分担を決めるとともに、難しい内容を分かりやすく伝えるための工夫についても議論するなど、一丸となって作業が進められました。

フォーラムの成功にはまた、熱心な山城愛好者が集まったことにも一因がありますが、それはこの間、西播磨県民局が鋭意、進めてこられた西播磨の山城を活用し、交流人口の拡大を目指すプロジェクトの成果でもあります。それに協力し、共同歩調を取ってきたひょうご歴史研究室としても嬉しい反響です。発足以来の経緯を思い出してみれば、前半、赤松円心や則祐・満祐などの武将赤松氏に当たっていた焦点が、後半に白旗城や城山城・置塩城・利神城など西播磨の山城と共鳴することで、文字通り「赤松氏と山城」というテーマに結実したといえるのではないのでしょうか。当日のフォーラムにご登壇された先生方、本特集に寄稿された執筆者に対し、心より御礼申し上げます。

なお、赤松氏と山城研究班は本年度の成果をもって解散となります。この八年の間、赤松氏と山城研究班にご協力賜りました皆様に対し、深甚なる謝意を表したいと思います。

令和五年（二〇二三）三月

兵庫県立歴史博物館長兼ひょうご歴史研究室長

藪田 貫